

江戸川乱歩と精神分析

—論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱(一)」を読む—

広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 鶴田一郎

Abstract: Rampo Edogawa's a paper "Secret Passion of J. A. Symonds—1st—"(1933) has been considered by this article. His papers were published over 4 times, but it had ended incompletely. The first time carrying part of the papers in the 4-time-series is made a subject of research this time. His papers were published by a "Psychoanalysis" magazine originally. This magazine was the scientific journal that Tokyo Psychoanalysis Science Research Center had been issued. Mr. Kenji Otsuki who had a pioneer of psychoanalysis in our country by himself was supervising the research center. When a theme is narrowed down to "Greek Love", "homosexuality", and "paiderastia, or boy-love", the "analysis on John Addington Symonds " of the Rampo's paper(1st) was very sharp and excellent. But, when from the view point of psychoanalyzing it, I said it was insufficient. Then, I will try re-interpretation of three dreams that Symonds saw. In the case, comparison of Plato's "carriage of two building" is quoted.

要約: 本稿では、大槻憲二が主宰していた東京精神分析学研究所が発行する『精神分析』に 1933 年に発表された江戸川乱歩の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第一回掲載分について検討・考察を行った。乱歩のシモンズ分析は「ギリシヤ的愛」すなわち「同性愛」「少年愛」「パイデラスティア」にテーマを絞ると大変鋭く優れたものだが、「精神分析」の立場から言うと、まだ不十分であり、筆者はそれを補うべく、シモンズが見た 3 つの夢の解釈をプラトンの「二頭立て馬車の譬え」を用いて補完した。尊敬する探偵作家・江戸川乱歩に対して不遜な態度を取ってしまったかもしれないが、「乱歩先生」の未完の論考が少しでも完成の方向へ行くお手伝いができればと考えている。

キーワード(Key Words): 江戸川乱歩(Rampo Edogawa)、精神分析(psychoanalysis)、J・A・シモンズ(John Addington Symonds)、ギリシヤ的愛(Greek Love)、パイデラスティア(paiderastia)

I. はじめに一問題の所在—

探偵小説家・江戸川乱歩(以下、「乱歩」と略)が遺したエッセイ・論文の中で一際目につくのは「J・A・シモンズ」(John Addington Symonds,1840-1893)という名前である。部分的に触れたものも含めて以下9点存在する。[なお、本稿においては、一部の例外を除いて、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに直して引用する。]

- ①「J・A・シモンズのひそかなる情熱(一)」(江戸川 1933a)
- ②「J・A・シモンズのひそかなる情熱(二)」(江戸川 1933b)
- ③「J・A・シモンズのひそかなる情熱(三)」(江戸川 1933c)
- ④「J・A・シモンズのひそかなる情熱(四)」(江戸川 1933d)
- ⑤「シモンズ、カーペンター、ジード」(江戸川 1936a)
- ⑥「書齋の旅」(江戸川 1940)
- ⑦「同性愛文学史—岩田準一君の思い出—」(江戸川 1952a)
- ⑧「私の読書遍歴」(江戸川 1952b)
- ⑨「精神分析研究会—昭和八年度—」(江戸川 1954)

なぜ乱歩は、これ程までにシモンズに^{こぼ}拘ったのだろうか。また、なぜ、その論文(上の①から④の文献)を大槻憲二が主宰する東京精神分析学研究所の研究誌『精神分析』に寄稿したのだろうか。精神分析が直接的なテーマとなっている乱歩作品は[大正 14 年=1925年初出ということで共通の]、①「連想試験」がモチーフとなる『心理試験』(大正 14 年 2 月初出)、②「夢遊病者」の殺人を題材にした『原題：夢遊病者彦太郎の死(別題：夢遊病者、改題：夢遊病者の死)』(大正 14 年 7 月初出)、③「錯誤行為」が無意識の殺人となる『疑惑』(大正 14 年 9 月初出)の三点である。そして 1927 年発表の「精神分析学と探偵小説」では「精神分析学というものを知った時には、これこそ本当に探偵小説だ、そして、探偵小説の行くべき道を暗示してくれるものだと、快心を覚えた」(江戸川 1927, p.166)と述べている。

もとより、Žižek,S.(1992)が指摘するように「探偵と精神分析家の間の類似性に関しては、枚挙に暇がない程に既に十分に論じられてきている(The analogy between the detective and the analyst has been drawn often enough.)」(p.50)のだが、しかし、乱歩

が目指したのは、「精神分析」を直接的な作品テーマとするのではなく、精神分析の一つのテーマである「ギリシャ的愛」(Greek Love)すなわち「同性愛」(sexual inversion, or homosexuality)、「少年愛」(boy-love)、「パイデラスティア」(paiderastia)を探究することであった。

その文献渉猟の結果、偶然出会ったのが「J・A・シモンズ」であり、その文献を特に耽読していたのが上の4本の論文(①から④)が発表された1933年前後なのである。なお、1933年に乱歩が東京精神分析学研究所のメンバーに加わる大きな動機は、この会に「同性愛」に興味を持つ会員が複数いたからである(江戸川 1954, p.282)。

ところで、直接、作品の中に「同性愛」が描かれているのは1929年から1930年にかけて発表された『孤島の鬼』のみである。それに対して、シモンズ関連の文献を含めて、乱歩によって書かれた「ギリシャ的愛」すなわち「同性愛」「少年愛」「パイデラスティア」に関連するエッセイ等の文献は次の10点存在する。

- ①「乱歩打開け話」(1926)
- ②「槐多『二少年図』」(1934)
- ③「ホイットマンの話」(1935)
- ④「彼」(1936b)
- ⑤「もくず塚」(1936c)
- ⑥「恋愛不能者」(1949a)
- ⑦「二人の師匠」(1949b)
- ⑧「萩原朔太郎と稲垣足穂」(1951)
- ⑨「岩田準一」(1952c)
- ⑩「虚名大いにあがる」(1953)

以上を詳読して判明したのは、乱歩にとって「ギリシャ的愛」すなわち「同性愛」「少年愛」「パイデラスティア」研究は、単なる個人的な興味や、作品の参考にするための資料の一つ、もしくは学問的対象を超えて、自分自身の切実な問題、すなわち「自己の探究」であったということである。近藤(2007)は、天才の病と創造性の関係について研究する病跡学(pathography)の立場から「J.A.シモンズには明らかに乱歩の自己投影が見られる」(p.63)と述べている。この点で乱歩が「精神分析」に接近したのは正しかったと考えられ

る。なぜなら筆者も含めて「精神分析」の道を志す者は、そのスタートに際して、自分自身の心を探究したい、自分自身の心の課題を解決したいと思う人が大多数だからである。

このあたりのことを鋭く指摘する論文がある。以下に引用する。

昭和七年(1932年)、創作に嫌気のさした乱歩は二度目の休筆を宣言し、翌年(1933年)「J・A・シモンズのひそかなる情熱」が書かれる。先に[シモンズへの乱歩の一引用者、以下同じ]自己投影と記したが、いま少し具体的に言うならば、ここで乱歩は、語られる自己を、シモンズに投影することで、語る自己から独立させようとしたのである。語られる自己とは、夢想の核と言ってもよいのだが、〈学問〉に相似の探偵趣味により創作を始めながら、モダニズム全盛下、ジャンルの周辺領域に追いやられた自己であり、通俗小説を大量に生み出す一方でギリシャ的恋愛を憧憬する自己であり、しかもあくまで常識人なる自己である。自己に執着しながらも赤裸々な告白を憎んだ乱歩は、シモンズを得てようやく告白の方法を手にする。自己は〈探究〉の対象となるのである(浜田 1991、pp.52-53)。

一方、アジア太平洋戦争後の 1951 年頃、乱歩は「同性愛の理想と現実」について、稲垣足穂と対談を行っているが、その中で同性愛に関する精神分析的解釈を次のように披露している。

男の子はお母さんに無意識的恋愛を感じて、父を競争相手として母の愛を争う。意識下ではお父さんを敵に廻すのだよ。この潜在意識はいろんな形で現れる。一女ならば逆にお父さんに恋愛するものが多い。どこの家庭でも女の子は父にあまえる。潜在意識にそういう要求がある、と精神分析ではおしえる。これは本当だと思う。しかしたまには男の子の中に「お父さん子」というのがある。こういう少年には女性分子が多いわけだ。だから、同性の父の方に惹かれる。同様に、少女で「お母さん子」であった者は男性的分子が多い。女性同性愛の場合は、男性分子の勝った女の子、つまり男みたいな少女が同性愛における男性の立場を採る。普通のやさしい女の子の方が女性の立場になる。男の場合とはあべこべだ。男の場合は、愛する方は普通の男で、愛されるのが女性的男子。—こう云ったからって、男が女を愛することは、女が男を愛するということにもなるから、愛する方が女性的男子、愛されるのが普通の男子と云ってもよい。したがって、女の場合は愛される方が普通の女で、愛する方が男性的であるが、愛される方が男性的、愛する方が普通の女だという関係も成り立つわけだ。い

ずれにしても、そういう性質の子が女学校なんかで同性愛を始めると、これが流行になって、もともとその性質を持合わせていない者もまねるに至るものだ。それが出発点でだんだん深刻になってゆく場合もあるだろうが、たいていは単なる邪気のない遊びに終るのが多いと思われる。だから、それがしの学校では同性愛が流行していると云っても、精神的なものが大部分である。つまり制服の処女です。—ジイドも、シモンズやホイットマンの場合にしても、この人たちのそういう思想に立った文学も、原則として実行に移されないからこそ生れてくるのである。実行してしまえばかけなくなるはずだ。抑えているからやがて作品として現われる。これが同性愛の理想的な方向だろうね(稲垣 1951、pp.157-158)。

本研究では、江戸川乱歩の「ギリシャ的愛」すわわち「同性愛」「少年愛」「パイデラスティア」への志向に関して考察していくために、まず初めに、その論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」を検討したい。ただし、これは大分の論文[(一)から(四)]であるので、発表された順に掲載一回分ずつ着実に考察を進めていきたい。そこで今回は「J・A・シモンズのひそかなる情熱(一)」(江戸川 1933a)を対象にすることにするが、次節では、この論文の概要、すなわち乱歩の見解をまとめる。続く第Ⅲ節では、その乱歩の見解に対する筆者の見解を述べる。さらに第Ⅳ節では本稿全体のまとめを述べたい。

Ⅱ. 上掲論文の概要[乱歩の見解]

乱歩は上掲論文の中ではJ・A・シモンズに関する研究論文を書くに当たっての「動機」や「目的」といったことは明確にしていないが、別稿(江戸川 1954)において「彼[シモンズ—引用者、以下同じ]の全著作の中から、同性愛への彼のひそかなる情熱を、実証的に探り出そうとしたのである」(p.285)と述べている。そのように勢い込んだ気持ちであったのに、もかかわらず四回で未完に終わっている理由として「[『精神分析』への寄稿に関して]とても月々の原稿締切りにまにあわなくなってきたのと、一方久しく探偵小説を書いていないので『新青年』からの督促がきびしく、おちおちサイモンズ[シモンズ]に耽っていられなくなった関係もあって、この無料原稿は残念ながらひとまず打切るほかなくなった」(江戸川 1954,p.285)としている。

乱歩は、まずシモンズの友人であったブラウン(Horatio Forbes Brown)が編纂した*John Addington Symonds ; A Biography* (Brown,H.F.1903) [*ただし乱歩が引用したの

は初版の 1895 年版]を引用し論文の端緒を切る。しかし乱歩は、この伝記に、シモンズが晩年、私家版で出した『ギリシャ道德の一問題 [Symonds,J.A.(1908) *A Problem in Greek Ethics*』(初版 1883 年)と『近代道德の一問題 [Symonds,J.A.(1896) *A Problem in Modern Ethics*』(初版 1891 年) [*筆者が参照した以上の二著は、シモンズ(1840-1893)の死後出版(1908・1896)されたものの復刻版]で正面から扱った「ギリシャ的愛」すなわち「同性愛」や「少年愛」「パイデラスティア」の問題が全く触れられていないことを嘆く。

上の二著の出自を整理しておきたい。月川(1993, pp.381-382)によれば、『ギリシャ道德の一問題』は、1883 年にシモンズが匿名で限定 10 部を私家版で発行したのが始まりで、後に 1901 年にロンドンで限定 100 部を発行、その内一冊を博物学者・南方熊楠が購入している。筆者が引用したのは、その 7 年後(1908 年)に発行されたものの復刻版である。一方、『近代道德の一問題』は、1891 年に限定 50 部を私家版で発行したのが始まりで、後に 1896 年にロンドンで限定 100 部が発行された。その内一冊を南方熊楠が購入している。筆者が引用したのは 1896 年に発行されたものの復刻版である。

乱歩自身は稲垣足穂との「同性愛の理想と現実」についての対談で『ギリシャ道德の一問題』に関して次のように述べている。

ぼく[乱歩]が一番感心しているのは、先に云ったシモンズの「ギリシャ道德の一問題」という本だが、これは初めは十冊しか刷らなかつた。というのは、キリスト教国では同性愛を罪悪視して、昔はために火刑に処せられたくらいだ。その十冊を知友をえらんで配った。その中には、アラビヤナイトの英訳者リチャード・バートンもはいつている。この本はあとで諸国で五十部百部と増刷され、ぼくも後の版で一冊持っているが、調子の高い良い本で、いつか訳してみたいと思っている。これはギリシャの哲学、演劇などの同性愛に関する文献が詳しく出ている(稲垣 1951, p.155)。

乱歩は先述したシモンズの伝記から省かれた「ギリシャ的愛」すなわち「同性愛」や「少年愛」「パイデラスティア」に関する直接的な記述(つまり、上掲の二著)は別として、間接的にはシモンズの伝記に、それらのことに触れられているところは多々あるとして、まずシモンズが少年期に繰り返して見た 3 つの夢に着目する。

夢1 [数えて7歳未満の幼児の頃の夢]

夢の中のシモンズが自邸の客間で人々と座っていると、入口のドアがひとりでに細目に開いて、そこから一本の指が這入って来る。見ていると、ドアをすべり込んで来た指の根元に手がないのだ。そのうしろに人間の身体もないのだ。ただ一本の青白い指だけが、フワフワと宙を漂って、関節を曲げて『お出でお出で』をしながら、段々こちらへ近づいて来る。しかもそれが、夢の中の同席の大人達には少しも気付かれず、ただシモンズだけに見えるのだ。アア、あの指奴が、今に私の身体に触ったら、それとも同席の誰かの身体に触ったら、と思うと、幼いシモンズは何とも云えぬ恐怖を感じないではいられなかった。だが、その指が誰かに触るというカタストローフが来る前に、彼は恐れ之余りに目を覚ますのが常であったという(江戸川 1933a, p.21)。

I dreamed that we were all seated in our well-lit drawing-room, when the door opened of itself, just enough to admit a little finger. The finger disconnected from any hand crept slowly into the room, and moved about through the air crooking its joints and beckoning. No one saw it but myself. What was the horror that would happen if it should touch me or any person present, I never discovered, for I always woke before the catastrophe occurred (Brown, H.F. 1903, p.7).

夢2 [数えて14歳頃の夢]

夢の中でフト気がつくと、彼のベッドの中に、彼の身体とくっついて、冷い人間の死骸が横たわっている。怖さに夢の中で飛び起きて、部屋を逃げ出し、暗い廊下を走って行くと、どこまで逃げても、その行く先々に、ちゃんと死骸が立ちはだかつて、彼の来るのを待ち構えているという夢であった(江戸川 1933a, p.21)。

It seemed to me that a corpse lay beside me in the bed. To escape from it, I got up and roamed about the house ; but there were corpses standing in the doorways as I hurried through the long dark corridors (Brown, H.F. 1903, p.36).

夢3 [数えて14歳頃の夢]

今度は一つの全く新しい形の夢が、繰返し私の安眠を妨げる様になった。それは、大きな青

い眼をして、豊かに波打つ金髪が、朦朧たる光輪を発している、一人の美しい青年の顔であった。彼はじっとわたしを見つめながら、段々私の上にかがみ込んで来て、遂に私の肌に触れる、と見て眼を覚すのが常であったが、すると青年の顔から発していた後光が、闇の中に溶け去って行くのが感じられるのであった(江戸川 1933a, p.22)。

A recurrent dream of quite a new sort now visited my slumbers. It was the beautiful face of a young man, with large blue eyes and waving yellow hair which emitted a halo of misty light. He bent down gazing earnestly till he touched me. Then I woke and beheld the aureole fading away into darkness (Brown, H.F. 1903, p.36).

乱歩の解釈では、夢1の「指の夢」は「胎児であった時に経験した父のペニスの記憶であるという、公式的な解釈が当てはまるかも知れない」(江戸川 1933a, p.22)と述べている。また夢2の「死骸の夢」は「それが誰の死骸であったか、男性か女性かも、自伝には記されていない」(江戸川 1933a, p.21)という。さらに夢3の「美少年の夢」に関して乱歩は明言は避けているが、「ギリシャ的愛」すなわち「同性愛」「少年愛」「パイデラスティア」に深く触れているので多弁を要するとしている(江戸川 1933a, p.23)。

夢3に関して乱歩はシモンズの次の言葉を引用する。

かように睡眠中に現われた私[シモンズ]の理想の美の幻影は、私の性格に深くも根ざしている生得の憧れを象徴していた。そして、後年私が様々の文芸美術から受けた深き感銘も、やはり同じ幻影のしからしむる所であった(江戸川 1933a, p.23)。

The vision of ideal beauty, thus presented to me in slumber, symbolized spontaneous yearnings deeply seated in my nature, and prepared me to receive many impressions of art and literature (Brown, H.F. 1903, p.37).

乱歩は上の引用の中の「私の性格に深くも根ざしている生得の憧れ」というシモンズの言葉に注目し、さらに読み解いていく。乱歩の紹介(江戸川 1933a, pp.23-24)に沿って伝記を読み進めていくと、シモンズは12、3歳の頃、家庭教師についてギリシャ語・ラテン語を学んでいたのだが、ある日、ホメロスの『イリアス』の最後の章を教わっていた時、「唇

と顎に薄ひげの生えそめる頃こそ、若者はこよなく美しけれ」(江戸川 1933a, p.23 ; ホメロス 1992, p.395) = “In the first budding of the down on lip and chin, when youth is at her loveliest.” (Brown, H.F. 1903, p.32) という詩に遭遇し、そのわずか二行の詩のあまりの美しさに驚愕し、家庭教師の前にもかかわらず、激しく泣き出したという。この「薄ひげの生えそめし青年」という表現は『オデュッセイア』(ホメロス 1994, p.259)にも見られる。つまり、この言葉はギリシャにおける少年愛の対象者を指すのである。シモンズが、この文脈に沿って更に進むと、プラトンの『饗宴』や『パイドロス』に出会った。これらを読んだ時のシモンズの衝撃を伝記は次のように伝えている。

ここに、このフェドラス[ギリシャ語『パイドロス』の英語読み]とシンポジウム[ギリシャ語『饗宴』の英語読み]の内に、一この魂の神話の内に、私[シモンズ]は長い間待ち望んでいた啓示を得た。長い間育んで来た私のある理想の清めを得た。それはあたかも、プラトーン[ギリシャ語「プラトン」の英語読み]を通じて私自身の魂が私に語る声の様に感じられた。悩みは跡形もなく消え失せた。私は今や確固たる地盤に立った。ここに、比類なき文章の魔術によって表現された、私自身の情熱の詩があった。哲学があった(江戸川 1933a, p.25)。

Here in the ‘Phædrus’ and the ‘Symposium’—in the ‘Myth of the Soul,’ I discovered the revelation I had been waiting for, the consecration of a long-cherished idealism. It was just as though the voice of my own soul spoke to me through Plato. Harrow vanished into unreality. I had touched solid ground. Here was the poetry, the philosophy of my own enthusiasm, expressed with all the magic of unrivalled style (Brown, H.F. 1903, p.63).

乱歩は上のことについて次のように述べている。

ほとばしる感激の言葉だ。かつて彼[シモンズ]が『イリアス』を読んで泣き出した折にも勝る興奮である。何故か。それは彼自身の異常なる情熱についての幼時からの不安を、この二つの対話篇が、跡形もなく拭い去ってくれたからだ(江戸川 1933a, pp.25-26)。

つまり、乱歩は先述したシモンズの「私の性格に深くも根ざしている生得の憧れ」という言葉の対象は「ギリシャ的愛」つまり「同性愛」ないしは「少年愛」「パイデラスティア」だったと結論付けているのである。

Ⅲ. 乱歩上掲論文の検討[筆者の見解]

前節の乱歩の見解は一流の探偵小説家としての面目躍如といった感があるが、精神分析の論文としては不十分なところがある。それは夢の分析に関してである。致し方のないことだが、精神分析の専門家ではない乱歩は、図式的なエディプス・コンプレックスに、その夢の解釈を帰着させている。この点について、乱歩の「私[乱歩—引用者、以下同じ]の理解力の範囲では、以上の夢[夢1・2]は別段ここに記す理由もないのであるが、夢分析に慣れた読者の一考を煩わしたい下心から、省略を見合わせたままである」（江戸川1933a,p.22）という言葉に触発されたわけではないが、筆者なりの分析を以下、展開してみたいと思う。

シモンズが青年のころ感激した『パイドロス』（プラトン1967、pp.69-76）には有名な「二頭立ての馬車の譬え」がある。この譬えは謂わば「魂の三分説」を次のようにわかりやすく表現したものである。すなわち、馭者が二頭立ての馬車を操っている。馭者及び二頭の馬それぞれが翼をもっている。翼をもつ馭者は「魂の指導的部分」すなわち「理性」を表す。馬は二頭いるが、一頭は翼をもつ白い馬であり、「意欲的に活動すること」すなわち「意志」を表す。もう一頭は、黒い馬であり、「本能的で盲目的な動きをすること」すなわち「欲望」を表す。「理性」をもった馭者が、白い馬（「意志」）は励まししながら、黒い馬（「欲望」）は叱りつけながら、全体として調和を保つのである。

別の言い方をすれば、御者は「理性」＝「自我」、白い馬は「意志」＝「靈魂（霊）」、黒い馬は「欲望」＝「肉体（肉）」と読みかえることができる。古代ギリシャのプラトンの考えで言えば「霊肉一元論」（心身一元論）すなわち「靈魂」（霊）と「肉体」（肉）は一体であり、その調和を図っているのが「自我」（理性）ということができる。この場合の「自我」は、所謂、後のキリスト教的「霊肉二元論」（心身二元論）で言う「霊の中にある自我が、肉の中にある自我を統御する」といった場合の自我ではなく、あくまでも「一体となった霊と肉とに方向性を与える機能」のことを言う。

一方、前節で3つの夢を夢1は「指の夢」、夢2は「死骸の夢」、夢3は「美少年の夢」

と命名した。これを使用しながら考察を続ける。ところで、子どもの頃のシモンズは「夢中遊行」(夢遊病)が激しかった時期があったと紹介されていた。乱歩が入会した東京精神分析学研究会の主宰者である大槻憲二(1965)によれば、夢中遊行(夢遊病)の症状における分離は、意識と無意識との間におけるものではなく、「一部意識が大部分意識から無意識的に離脱したもの」(p.122)すなわち「分れているものは共に意識なのだが、分れたこと自体については共に無意識である」(p.122)と述べている。つまり、意識のいくつかが無意識的に分離している状態が「夢中遊行」(夢遊病)である。

これまでの「二頭立ての馬車の譬え」と「夢中遊行の分析」の考えを使って3つの夢を解釈すると次のようになるだろう。シモンズの心は3つの意識に無意識に分かれていた。その3つの意識に対応するのが3つの夢である。夢1は「指の夢」であるが、乱歩が解釈したような父のペニスの象徴ではなく、「理性」(自我)を象徴する馭者を表すのではないか。そして夢2は「死骸の夢」であるが、「欲望」(肉体)を象徴する黒い馬の末路を表すのではないか。さらに夢3は「美少年の夢」であるが、「意志」(靈魂)を象徴する白い馬を表すのではないかと思われる。

馭者「自我」(夢1)が黒い馬「肉体」(夢2)と白い馬「靈魂」(夢3)をうまくコントロールしている間は全体として調和を保っていられる。その調和が完璧なまでに仮に高められた場合、馬車は無限の天空を時間や空間の制約を超え、自由に駆け巡ることができる。そうなれば、それは「不死なるもの」と呼ばれる。私たちが「超越者」「絶対者」と呼ぶもの、すなわち「神」になる。その場合の「自我」(ego)は、既に卑小な「自我」を超えており、あらゆるものを包摂した「自己」(self)と呼ぶことができる。それはまた「超個人的」(trans-personal)と言われるものを指す。

しかし、不完全な存在であるものは、黒い馬(欲望)に引き摺られて地上に墮ち、土とぶつかって、「肉体」をもち、ある程度の理性を備える「人間」(=「理性」=「自我」)(夢1)となる。人間であるため、「生けるもの」(=「意志」=「靈魂」)(夢3)と呼ばれると同時に「死すべきもの」(=「欲望」=「肉体」)(夢2)とも呼ばれる。つまり、人間として、「生」は有限であり、「死」は必ず訪れる避けられない運命である。これ故に人間は、この世界で激しい労苦と抗争にさらされるようになるのである。

三者の調和を完璧にして、天空を自由に翔けることができるためには黒い馬と白い馬のバランスを取ることが必要であるが、理想の愛である「ギリシャ的愛」すなわち「同性愛」「少年愛」「パイデラスティア」(夢3)を如何に発展させたとしても、欲望(夢2)が足を引っ

張る。「ギリシャ的愛」は、すぐに「魂の愛」ではなく「肉の愛」に墮落してしまう。それを「魂の愛」に再び導くのが理性的のだが、その理性も先述したとおり、生身の「人間」（夢1）としては限りがあるのである。

乱歩はブラウンがシモンズ(1840-1893)の伝記で「同性愛」「少年愛」「パイデラスティア」を直接的に扱った二つの論文(『ギリシャ道徳の一問題 [Symonds,J.A.(1908) *A Problem in Greek Ethics*』[初版 1883 年]、『近代道徳の一問題 [Symonds,J.A.(1896) *A Problem in Modern Ethics*』[初版 1891 年])に言及していない点を嘆きながら指摘していた。この点は乱歩は鋭いと思う。

二著は、以前にシモンズの晩年に私家版(1883・1891)として出されていたものをシモンズの死後再び出版(1901・1896)されたものだが、その内、前者の『ギリシャ道徳の一問題 [Symonds,J.A.(1908) *A Problem in Greek Ethics*』[初版 1883 年])の中で、シモンズは「ギリシャ的愛」は「同性愛」であり「少年愛」「パイデラスティア」であると明言し、それは古代ギリシャ世界において「社会により承認され、また世論によっても守られた、成人男性と少年の間に見られる、情熱的で熱狂的な性的関係が示唆される愛着(passionate and enthusiastic attachment subsisting between man and youth, recognized by society and protected by opinion)」(Symonds,J.A.1908, p.14)を意味すると述べている。

しかし、一方、二著の後者『近代道徳の一問題 [Symonds,J.A.(1896) *A Problem in Modern Ethics*』[初版 1891 年] の中では「この人間の魂の永続的な特色を指す学術用語[ギリシャ語「パイデラスティア (paiderastia)]」を、19世紀の型にはまった[古代ギリシャ語より遠く時間的に後に成立した]ヨーロッパ諸言語[例えば英語なら Greek Love, sexual inversion, boy-love など]で代用させようとしても無理なことであり、それらを用いる際、何らかの不快感や恥辱そして罵倒の意味あいなしではすまされない(The accomplished languages of Europe in the nineteenth century supply no terms for this persistent feature of human psychology, without importing some implication of disgust, disgrace, vituperation.)」(Symonds,J.A.1896, p.3)という発言をしていた。

つまり、このことを十分に理解していたシモンズの弟子でもあり年下の親友でもあるブラウンは意図的に伝記(初版 1895 年)から、上の二つの論文を外したのだと推測できる。海野(2008)では、ブラウンはイギリス南部ブリストル郊外にあるクリフトン・カレッジ(Clifton College)でのシモンズの教え子で「忠実な弟子として、シモンズの研究を助けた」(p.207)という指摘もある。

一方、なぜ「不快感」や「恥辱」や「罵倒」の意味合いを周囲から受けてしまうのかと言えば、上述したように不完全な存在である人間は、「霊の道」である「ギリシャ的愛」が、容易に「肉の道」すなわち肉体関係を伴った「同性愛」「少年愛」に陥るからであって、その誤解による非難から師匠でもあり年上の親友でもあるシモンズを守る為にブラウンは伝記から上の二つの論文を外したのだと考えられるのである。

その証左として、シモンズが死(1893年)の2年前(1891年)に、(1895年に出版されることになる)「自分の伝記」に関して、ブラウンに次のような手紙を書いている。これを最後に引用して、これから行う一連の研究のイントロダクションとしたい。

1891年12月29日

ホレイショウ・フォーブス・ブラウン様

「ダヴォス王の自伝について」[シモンズの冗句。スイスのダヴォスにてシモンズは人生の後半を過ごす]私[シモンズ]の自伝は、構想の上では、とても情熱的で、型にはまらない自由なものとなるでしょう。それだけではなく、いまだに分類されたことが一度もない、ある種の男性タイプ[「パイデラスティア」]を開示するという意味で、おそらく類のない、いや確かに無比の、並はずれて特異な本になると私は思います。ただ、この文書の構想が破棄されるべきではないと考えるがゆえに却って私は心配です。それは、ある人が自分の内的世界について極めて率直に語ることを、そのままに認識すること、つまり、私がやってきた通常の方法で、[あなた以外の]誰がいつ私の世界を十分に表現できるかが疑問だからです。私の死後の混乱から私の自伝を守っていただきたいのです。そして、私の家族が不当な扱いを受けなくて済む頃まで出版を見合わせてほしいのです。この困難にどう対処したらよいか私には全く心当たりがありません。あなたが、こちらにお見えになった時には、私は、それをご相談いたしたく存じます。もし、あなたのご厚意におすがりするとすれば、私の文書をあなたに引き継いでもらいたいのです。しかし、あなたは私の意思を尊重してくれることを確信しておりますので、文書を自由に取捨選択して構いませんし、好きなように文書をまとめてもらっても構いません。私は、私の自伝の構想が破棄されるべきではないという私の要望のあらましを述べてみました。ただし、今一度、この本の出版の危険性も認識していただきたく存じます。この点についてお考えがありますか。もし、そのようにできるならば、私の一般的な文学的業績および、その他の文書から、それ[「パイデラスティア」に関する部分]を除いて

いただきたいのです。なぜなら、人生の一般的な人間関係から著しく隔たったある特定の価値観の追究、すなわち、この事柄[「パイデラスティア」]について、どの友人にも、どの人にも迷惑をかけたくないからからなのです・・・。

神のご加護を。

ジョン・アディントン・シモンズ

(Grosskurth,P.1984, p.289)

H.F.B. Davos re Autobiography Dec.29.91

It was so passionately, unconventionally set on paper. Yet I think it a very singular book – perhaps unique, nay certainly unique, in the disclosure of a type of man who has not yet been classified. I am anxious therefore that this document should not perish. It is doubtful when or whether anyone who has shown so much to the world on ordinary ways as I have done, will be found to speak so frankly about his inner self. I want to save it from destruction after my death, and yet to reserve its publication for a period when it will not be injurious to my family. I do not just now know how to meet the difficulty. And when you come here, I should like to discuss it. You will inherit my mss. if you survive me. But you take them freely, to deal with them as you like, under my will. I have sketched my wish out that this autobiography should not be destroyed. Still, I see the necessity for caution in its publication. Give the matter a thought. If I could do so, I should like to except it as a thing apart, together with other documents from my general literary bequest; so as to make no friend, or person, responsible for the matter, to which I attach a particular value apart from life's relations....

God bless you.

J.A.S.

(Grosskurth,P.1984, p.289)

IV. おわりに—まとめに代えて—

本稿では、江戸川乱歩の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第一回掲載分について検討・考察を行った。乱歩のシモンズ分析では、世俗に塗れた「肉の愛」としての「同性愛」「少年愛」は否認され、純粹に理想化された「靈の愛」としての「ギリシヤ的愛」すなわち「パイデラスティア」に焦点が当てられていた。それはシモンズが見た3つの夢の乱歩による解釈に顕著であるが、精神分析の立場から言うと、かなり課題を含んでおり、筆者は、それを補うべく、シモンズが見た3つの夢を、プラトン『パイドロス』の中の「二頭立て馬車の譬え」を用いて再解釈した。その結果、それらの夢はシモンズにおける自身の「肉の愛」と「靈の愛」の葛藤を表現したものであることが分かった。

なお、今回は上掲論文の第二回掲載分についての検討を行う。

引用文献

Brown, H.F. (1903) *John Addington Symonds ; A Biography.* (2nd edition) London: Smith, Elder, & Co., New York: Charles Scribner's Sons [reprinted edition by BiblioLife].

江戸川乱歩(1926)「乱歩打開け話」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.23-31。

江戸川乱歩(1927)「精神分析学と探偵小説」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.166-168。

江戸川乱歩(1933a)「J・A・シモンズのひそかなる情熱(一)」『精神分析』(東京精神分析学研究所)1(1), pp.16-26。

江戸川乱歩(1933b)「J・A・シモンズのひそかなる情熱(二)」『精神分析』(東京精神分析学研究所)1(2), pp.161-171。

江戸川乱歩(1933c)「J・A・シモンズのひそかなる情熱(三)」『精神分析』(東京精神分析学研究所)1(4), pp.410-419。

江戸川乱歩(1933d)「J・A・シモンズのひそかなる情熱(四)」『精神分析』(東京精神分析学研究所)1(6), pp.614-622。

江戸川乱歩(1934)「槐多『二少年図』」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.498-504。

江戸川乱歩(1935)「ホイットマンの話」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.505-511。

願』光文社、pp.485-493。

江戸川乱歩(1936a)「シモンズ、カーペンター、ジード」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.494-497。

江戸川乱歩(1936b)「彼」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.375-410。

江戸川乱歩(1936c)「もくず塚」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.472-484。

江戸川乱歩(1940)「書斎の旅」江戸川乱歩(2005)『江戸川乱歩全集 第24巻 悪人志願』光文社、pp.468-471。

江戸川乱歩(1949a)「恋愛不能者」江戸川乱歩(1957)『わが夢と真実』創元社、pp.70-72。

江戸川乱歩(1949b)「二人の師匠」江戸川乱歩(1957)『わが夢と真実』創元社、pp.153-154。

江戸川乱歩(1951)「萩原朔太郎と稲垣足穂」江戸川乱歩(1970)『江戸川乱歩全集 13 探偵小説四十年(上)』講談社、pp.112-116。

江戸川乱歩(1952a)「同性愛文学史—岩田準一君の思い出」江戸川乱歩(1957)『わが夢と真実』創元社、pp.140-152。

江戸川乱歩(1952b)「私の読書遍歴」江戸川乱歩(1957)『わが夢と真実』創元社、pp.269-272。

江戸川乱歩(1952c)「岩田準一」江戸川乱歩(1970)『江戸川乱歩全集 13 探偵小説四十年(上)』講談社、pp.154-155。

江戸川乱歩(1953)「虚名大いにあがる」江戸川乱歩(1970)『江戸川乱歩全集 13 探偵小説四十年(上)』講談社、pp.218-220。

江戸川乱歩(1954)「精神分析研究会—昭和八年度」江戸川乱歩(1970)『江戸川乱歩全集 13 探偵小説四十年(上)』講談社、pp.280-296。

Grosskurth,P.(edited)(1984) *The Memoirs of John Addington Symonds ; The Secret Homosexual Life of a Leading Nineteenth-Century Man of Letters*. Chicago: The University of Chicago Press.

浜田雄介(1991)『『収集家』としての江戸川乱歩—作品との連関を軸に』『国文学 解釈と教材の研究』(学燈社) 36(3)、pp.48-54。

ホメロス(1992)『イリアス(下)』(松平千秋訳)岩波書店。

ホメロス(1994)『オデュッセイア(上)』(松平千秋訳)岩波書店。

稲垣足穂(1951)「E氏との一ター—同性愛の理想と現実をめぐるて」『作家』(作家社)36、

pp.143-159。

近藤等(2007)「江戸川乱歩の病跡—同性愛志向の発露と創造性」『日本病跡学雑誌』(日本病跡学会)74, pp.63-64。

大槻憲二(1965)『夢の分析法—不眠症療法』育文社。

プラトン[藤沢令夫訳](1967)『パイドロス』岩波書店。

Symonds, J.A.(1896) *A Problem in Modern Ethics*. London: author's private edition [reprinted edition by Biblio Bazaar].

Symonds, J.A.(1908) *A Problem in Greek Ethics*. London: author's private edition [reprinted edition by Filiquarian Publishing].

月川和雄(1993)「シモンズ(Symonds, John Addington 1840~1893)」松居竜五・月川和雄・中瀬喜陽・桐本東太(編)『南方熊楠を知る事典』講談社、pp.380-383。

海野弘(2008)『ホモセクシャルの世界史』文芸春秋。

Žižek, S.(1992) *Looking Awry ; an introduction of Jacques Lacan through popular culture*. Cambridge, Massachusetts, USA & London, UK : The MIT Press.